

4/27(土)早稲田大学国語教育学会の例会(第二七九回)で、江畑哲男は研究発表をしてきました。テーマは「川柳、国語教材化への道」でした。40年以上追いかけてきたテーマを、この日に発表にぶつけました。

発表時間はわずかに20分。その20分を有効に使って、言語明瞭に、言いたいことを言ってきました。しかしながら、その後の質疑応答で撃沈されました。二人の大学教授からダメ出しをされちゃいました。

手厳しいものでした。

N教授は、学問的観点から。

I教授は、教科書編纂の時間的手続きの観点から。

要するに、「(江畑の)情熱は分かるけど、それだけでは教科書には載せられない」ということでした。



以下は、発表の要旨です。ご覧下さい。

## 川柳、国語教材化への道

江畑 哲男

川柳を国語の教科書に載せたい、そう熱望するようになってから四〇年が経った。この間の国語教師としての実践と、国語教材化への努力や試行錯誤の経過を報告しながら、「国語教材化への方途」や「何が足りないのか」をご一緒に探ってまいりたい。

### 1 川柳の魅力

日本文学は韻文の占める地位が、きわめて高く大きい。短歌・俳句・川柳その他短詩型文芸も幾つかあるが、川柳ほど思春期の子ども達にふさわしい文芸はないのではないか。「言語活動の充実」を求める学習指導要領にも合致するのみならず、口語で自由闊達に森羅万象を詩の対象と出来る川柳は、創作文芸に最も適していると思われる。

### 2 川柳を学ぶ環境と教科書教材

今日川柳を学ぼうとすれば、方法は幾つもある。

- (ア) 国語の授業で。
- (イ) 「総合学習」の時間に。
- (ウ) 生涯学習の一環として。
- (エ) その他。

右のうち、(ア)の機会だけが稀である。何故か？ 国語教科書に川柳が掲載されていないからだ。

- ① 学習指導要領に準拠。
- ② 教材としての普遍性・適性。
- ③ 教育目標や指導目標の明示。
- ④ 現場の教師への具体的ケアなどが求められよう。

筆者は、あらゆる機会を捉えて、川柳の教材化、その意義と実践、研究成果等々を語ってきた(千葉県教育委員会国語部会、教科書会社、本学会等)。筆者の結論としては、川柳エッセイの教材化が適切かつ現実的だと考えている(現に一時期、田辺聖子のエッセイが採録されていた)。国語の教科書はどうあるべきか。教材の適否の基準は何か。川柳教材化への実践報告を通じて、改めて考える機会となれば幸いである。

(念のため)  
ページの拡大は「Ctrl」+「+」で  
縮小は「Ctrl」+「-」で  
印刷時は、プリンターで80%ほどに  
縮小してください。(HP担当)